

平成二十七年 度

第六十一回青少年読書感想文コンクール

札幌市読書感想文コンクール部門

受賞作品集

小学校・中学校・高等学校

札幌市学校図書館協議会

後 援

札幌市

札幌市議会

札幌市教育委員会

札幌市PTA協議会

北海道高等学校PTA連合会石狩支部

第61回 札幌市読書感想文コンクール 入賞者一覧

平成27年度

札幌市長賞	札幌市立藤野小学校 5年 自由 かけがえのない家族、かけがえのない命	伊田 紗雪
札幌市議会議長賞	藤女子中学校 1年 自由 相手の立場になって	宮下 巴菜
札幌市教育長賞	札幌聖心女子学院高等学校 3年 自由 平和への祈り	田中 花歩
札幌市学校図書館協議会 会長賞 1	北海道教育大学附属札幌小学校 2年 課題 ママの三りん車	深見 理良
札幌市学校図書館協議会 会長賞 2	札幌市立向陵中学校 3年 自由 「夏の朝」を読んで	小林 みなみ
札幌市学校図書館協議会 会長賞 3	札幌聖心女子学院高等学校 3年 自由 「生きる」ということ	福井 春菜
札幌市PTA協議会 会長賞 1	札幌市立幌西小学校 4年 自由 ソーセージ	綾部 茉利子
札幌市PTA協議会 会長賞 2	藤女子中学校 2年 自由 前へ進む	阿部 晴香
札幌市PTA協議会 会長賞 3	札幌光星高等学校 1年 自由 「食べる」ということ	根本 莉帆
北海道高等学校PTA 連合会石狩支部長賞	北海道札幌旭丘高等学校 1年 自由 医療における優しさ	工藤 七海
光陽社賞	札幌市立幌西小学校 6年 課題 きれいなきれいなひかり色	丹野 菜々子
キハラ賞	札幌市立向陵中学校 1年 自由 将来への歩み方とは	畠山 日菜
教育出版賞	札幌市立八軒小学校 1年 課題 クレヨンありがとう	藤田 さくら
北海教育評論社賞	札幌聖心女子学院中学校 3年 自由 船の行方	瀧田 小麦
図書館ネットワーク サービス賞 1	札幌市立日新小学校 5年 指定 私の目標と登山	興津 南々星
図書館ネットワーク サービス賞 2	藤女子中学校 2年 自由 群れの中で生きる	金古 桃香

学校賞

毎日新聞社賞

小学校
中学校
高等学校

該当校なし
藤女子中学校
該当校なし

優良賞

◇小学校の部 低学年

- 自由・「しっばいにかんばい！」をよんで
課題・クレヨンにてがみをかきたい
・ゆいのかあさんとわたしのママ

教育大学附属小	1年	佐々木	凜斗
共栄小	1年	高井	咲綺
桑園小	2年	岡	七海

◇小学校の部 中学年

- 自由・せんそうってどんな事
・ぼんこつラーメンって、何
指定・イランカラブテ武四郎さん

宮の森小	3年	松田	莉奈
幌西小	4年	遠藤	匠真
山の手小	4年	野崎	幸子

◇小学校の部 高学年

- 自由・「ゆきがくれたおくりもの」を読んで
課題・“友達”という名の“家族”
指定・「行動」で伝える

八軒小	5年	榎本	陽子
日新小	6年	清水	彩音
日新小	6年	松尾	桃香

◇中学校の部

- 自由・命の重み
・今を生きることを考える
・後悔を少なくする
課題・「夏の朝」を読んで
自由・「赤毛のアン」を読んで
・「夜のピクニック」を読んで
・卒業したい
・信頼を築く
・苦難を超えた海
・強さの先にあるもの～風が強く吹いている

向陵中	1年	小河	奏瑛
宮の森中	1年	佐藤	帆
藤女子中	1年	三河	朱音
聖心女子学院中	1年	児玉	優子
八軒中	2年	飯田	夏帆
向陵中	2年	川崎	はるか
藤女子中	2年	椿原	佑花
向陵中	2年	山村	航輝
宮の丘中	3年	小林	詩環
宮の森中	3年	清水	環

◇高等学校の部

- 自由・「魔術」の新しい読み方
・「神様のカルテ」を読んで決意したこと
・「きらきらひかる」を読んで
・希望の海～私の旅の始まり～

旭丘高	1年	平野	公暉
光星高	2年	下横	未来
啓成高	2年	藤井	侑穂
光星高	3年	伊澤	佑佳

佳作

◇小学校の部 低学年

- 自由・「エルマーのぼうけん」を読んで
 ・「あしたあさってしあさって」を読んで
 課題・「いいことおしえてくれてありがとう」
 指定・人の立場になって

桑園小 1年
 新琴似南小 2年
 幌東小 2年
 北陽小 2年

高山大也 知夏
 川西紗原香 夏智
 小笠田香 桜

◇小学校の部 中学年

- 自由・「はじめてのかり」を読んで
 ・「おさびし山のさくらの木」を読んで
 課題・「パオズになったおひなさま」を読んで
 指定・ぼくのクラスだったら

八軒小 3年
 共栄小 3年
 伏見小 3年
 日新小 3年

榎本慧芽 大依
 橋部芽千玲 優生
 服部會 玲

◇小学校の部 高学年

- 課題・伝えなかったありがとう
 自由・「いのちの花」が私に伝えること
 指定・家族の存在
 ・『槍ヶ岳山頂』を読んで

八軒西小 5年
 手稲鉄北小 6年
 日新小 6年
 桑園小 6年

丹波真帆 子々
 秋原奈瑞 々樹
 阿部村恵 都

◇中学校の部

- 自由・「楽隊のうさぎ」を読んで
 ・夢をあきらめない事を完成させてくれた本
 ・「速く」ではなく「強く」
 課題・「日々の積み重ね」
 ・「ブロード街の12日間」を読んで
 自由・私の友だちへ
 ・アンネと日記と私
 ・「友だち」とは
 ・候補生から学ぶ姿勢・人間性
 課題・未来へ繋がる想い～夏の朝を読んで～
 自由・パナマといえは？
 ・生きるとは何か。
 ・「ひめゆりの塔」を読んで
 ・「ちょっと今から仕事やめてくる」を読んで
 ・「モリー先生との火曜日」を読んで

向陵中 1年
 藤女子中 1年
 宮の森中 1年
 向陵中 1年
 向陵中 1年
 向陵中 2年
 藤女子中 2年
 星置中 2年
 藤女子中 2年
 あやめ野中 2年
 北嶺中 3年
 宮の森中 3年
 新川中 3年
 向陵中 3年

斎藤凛も 音も
 佐佐長瓦林木千理有 子地
 藤野大 尋
 藤野木 紗希
 高橋達木 望
 竹達木 優
 吉池 菜
 菊夏 菜
 金潭花 子
 齋藤花 延
 佐藤利 子
 渡利 真 歩
 貴子

◇高等学校の部

- 自由・選択の意味
 ・TUGUMI(つぐみ)を読んで
 ・お金と幸せの答え

啓成高 1年
 啓成高 1年
 光星高 2年

大山倫 菜
 佐藤愛 純
 谷

札幌市長賞

かけがえのない家族、かけがえのない命

札幌市立藤野小学校 五年 伊田 紗雪

『ガラスのうさぎ』の作者である敏子さんが生まれた東京・西国を、わたしは夏休みにおとずれた。緑が豊かで、七十年前にこの一帯が焼野原になったとは信じられなかった。

敏子さんの家のガラスのうさぎの置物は、昭和二十年三月の東京大空しゅうにより、体の半分以上がとけて見つかった。家の中にいた敏子さんの母と二人の妹も、燃えさかるほのおの中、同じ苦しみを味わったにちがいない。わたしは息が苦しくなるほど、いかりと悲しみがこみ上げてきた。妹は、「おはぎをおなかいっぱい食べないうちは、絶対死なないから。」と言ったまま、行方不明になってしまったのだ。こんな悲しい言葉があるだろうか。

母と妹たちを失ったショックからまだ立ち直っていない八月、今度は目の前で父が機じゅうそうしやを受け、なくなってしまった。もしわたしの家族が、目の前でなくなってしまうたらと創造するだけで、なみだがにじんでくる。今まで笑っておしゃべりをしていたのに、話すこともできしめることもしてくれない。死ぬとは、何ておそろしいことなんだろう。一人ぼっちになった敏子さんは、悲しみのあまり思わず海の中に入っていった。その時、敏子さんを引き止めたのは、『自分がいなくなったら、だれが、家族のためにお墓参りをするのだろうか』と家族を思う気持ち。家族のために再び生きる決心をしたのだし、なき家族が、敏子さんの命を救ってくれたのだ。

三人きょうだいの末っ子のわたしは、いつも家族から何かをしてもら

らうばかりだ。わたしが家族のために何かをしてあげたことなど、無かった気がする。しかし両親も姉や兄も、「さゆちゃん、いてくれるだけでいいの。」と言ってくれる。その言葉を聞かされたら、わたしは温かくて幸せな気持ちになれる。なぜ、『いるだけでいいか』という、それは家族だからだ。戦争は、そのかけがえのない家族をも、とつらうばってしまう。敏子さんは、「わたしの家族は、どんな顔の兵隊さんに殺されたのかさえ分からない。だれにこのいかりや悲しみをぶつけたいか、わからない。」とくやしがる。だが、くいの残らないように生きるために、わずかな時間でも勉強したいと考えた敏子さんは、殺された家族の分まで強くなったのだ。限りがあるから大切にしなければならぬ。自分の命も、家族の命も。世界中の全ての人々の、かけがえのない命も。

わたしの祖母も戦争体験者で、樺太・今のサハリンで生まれた。樺太ではソ連のこうげきで、五千人以上がなくなり、祖母の町でも、二百人以上の人々がぎせいになったそうだ。「無事北海道に引きあげて来られたのは、運が良かったからで、いつ死んでもおかしくない状況だった。それが戦争なんだよ。」と祖母は言う。祖母の命があるから、母もわたしも生まれた。幸せな生活しか知らないわたしだからこそ、多くの人に伝えよう。命をつないでくれた祖母の思いを。そして、家族の分まで生きてきた敏子さんの強さを。

札幌市議会議長賞
相手の立場になって

藤女子中学校 一年 宮下 巴菜

真の友情とはどういうものか。それは、つらい事や苦しい事を共に乗り越えたときに、おたがいの心にできる、太い太い糸のことだ。この糸が結ばれたときに真の友情が生まれる。

この本の主人公、美月とはるひには、強くて太い糸が結ばれた。いじめにあったはるひを見て、美月の心はとても複雑だった。美月は、いじめっ子のリーダー、きよんちゃんの気持ちもよく分かっていたからだ。「はるひときよんちゃん。どっちの味方につけばいいのか分からない。」というのが、美月の気持ちだった。結局、美月はきよんちゃんたちの味方になった。だけど、自分のしていることがひどい事だということに気づき、はるひと仲直りをした。つまり、美月とはるひは、一緒にいじめを乗り越えてはいない。しかし、美月ははるひの気持ちを知ったため、一緒につらい思いをした。だから、美月とはるひには強くて太い糸が結ばれたのだ。

この本のおかげで、「相手の立場に立ってみる」ということが大切だと改めて知った。今までの私は、なんでも自分優先に考えていた。友達と遊ぶ場所を決めるとき、私は毎回同じことばかり言ってしまう。友達は、もっとちがう場所で遊びたいのだけれど、毎日毎日、友達は私のしたいことにつきあってくれる。いつまでたっても、友達と遊びたいところでは遊べない。そんなことが、今までに何度もあった。ところが、この本を読んで相手の気持ちを考えるようになった。そうすることで、一度冷静になれるし、仲直りができるかもしれない。

このような出来事は人生の中でたくさんある。だからこそ、相手の立場になって考えてみることは大事なことだ。

美月とはるひは、おたがいの気持ちを知ることができたから仲直りをする事ができた。もし、おたがいに自分のことしか考えていなければ、ずっと仲直りはできないままだろう。

私には、つらい時に本当のことと逆のことを言ってしまうというところがある。小学生のころ、友達とケンカした時に、本当は仲直りしたいのに、「いいよ、もう。〇〇ともう話さないから。」と言ってしまっ、結局、長い間ずっとケンカしたままの状態が続くことが、時々あった。そのときは、「あんなこと言わなければ、合っ

はきつと仲直りしてたのかも…。」と思って、夜はいつも、どうしたらいいのだろうと考え込んでいた。

はるひも、一番そばにいてほしい美月に、「私といっても、美月なんだか落ち着かないよ。本当はきよんちゃんたちと一緒にいたいんですよ。」と言ってしまったため、美月はきよんちゃんたちの味方になってしまった。

同じような経験が私にもあるから、はるひの気持ちもよく分かった。

この本で、はるひが先生にひいきされているのを、きよんちゃんたちが先生に話したら、討論会になったという場面がある。きよんちゃんたちをはじめ、はるひの思っていることを、クラスみんなに伝えられたという場面を読み、とてもびっくりした。

私も思っていることを、ハッキリ口に出して言えば、スッキリする。そして、ケンカしていたら、仲直りするきっかけとなる。だから、この場面が一番私の中で印象に残った。

私には一つ、疑問がある。それは、「なぜ美月が自分の気持ちをはるひやきよんちゃんたちに、早く言わなかったのか」ということだ。

私だったら、言いたいことはすぐに言うと思う。言いたいことを言えば、相手の気持ち分かるから、大きなトラブルにはならないと考えるからだ。だから、言いたいことを素直に言うことも真の友情につながるのだ。

私の中で、「友達を大切にしよう」ということは、すごく、すごく大切なことである。この本を読んで改めて、そう気づいた。理由は、友達がいないと学校にも行きたくなるからだ。友達がいるからこそ、学校で勉強する気にもなるし、「がんばろう」という気持ちにもなる。そして、何より学校が楽しいと思える。その他、悩み事などあったときは、相談できるという点もある。親には言いつらい話を一人で悩んでもゆうつつになるだけだ。そんな時、友達が相談にのってくれたらものすごく心強い。だから、友達は私の中で大切な存在だ。

私はこれから先、相手の立場に立ち、友達を大切にしようということを意識して友達とつき合っていきたい。

真の友情とは、友達とつらい事や苦しい事を乗り越えたときプラス、言いたい事を素直に言えたときに見える太い糸のことだ。この糸が結ばれたら、真の友情が生まれたという証拠ということだ。

対象図書 「教室、6・1がこわれた日」 斉藤 栄美・著 ポプラ社

札幌市教育委員会 教育長賞

平和への祈り

札幌聖心女子学院高等学校 三年 田中 花歩

今から七十年前、日本の戦争は終結した。私はこの本をよみ、戦争は絶対にあつてはならないことだという意識を改めて強くした。

この本は、永井隆博士の長崎での被爆体験記である。永井博士は長崎医科大学で放射線医学を専攻し、過度の放射線を浴びて白血病の身となっていた。そして一九四五年八月九日、一発の原子爆弾が長崎市の上空で炸裂した。熱風と爆風で一瞬にして何もかもが変わり果てる様子は、想像するのでもさへ恐ろしかった。そのとき、博士はこめかみの動脈を切りながらも、助かった仲間とともに必死で被爆者の救護にあたった。その間、大学が長年集めてきた標本や器械、論文の資料に火が回るのをただ見ていることができなかつた気持ちと思うと、虚しさや絶望を感じた。しかし、博士たちはいつまでも嘆いてはいなかつた。原子物理学の研究者であり原子爆弾の被害者である自分たちこそが、原子病という新しい病気を研究しなければ、という使命感を持ったのだ。そして戦争に敗れた悲しみの中でも、尊い命を助けるため重い体にむち打った。これは、誰にでもできることではないと私は思う。

私は、高校二年生の見学旅行で初めて長崎を訪れた。原爆資料館や浦上天主堂などを見学して回り、原子爆弾の恐ろしさやキリスト教と長崎の深いつながりを実感した。長崎はかつて日本におけるキリスト教の中心であり、爆心地の浦上地区は潜伏キリシタンがいた信仰の強い場所である。永井博士も二十六歳のとき、カトリックの洗礼を受けた。

「浦上は神に感謝をささげねばならぬ」

原子野に建てたトタン小屋で、博士は家族を亡くした人にこう言った。浦上が原子爆弾の犠牲となったからこそ日本は終戦を迎えることができ、多くの命が救われたのだ。この言葉は、とても印象的だった。多くの人が、原子爆弾による死は天罰であり、生き残った者は恵まれていたのだと考えていた。しかしその中で、罪深い者だからこそ生き残ったのだと博士は語る。私は、なぜそれほどまで自らに厳しくならなければいけないのか理解できなかった。戦争で大切な人を失うのは誰にとっても悲しいことだ。奥さんや教え子たちを失った博士の心も、悲しみであふれていた。やり場のない怒りもきつとあるだろう。しかし生き残った者にとつては、復興

に向かうこれからの道のりこそが本当の苦しみなのだと私は気づいた。博士の言葉は、それを罪の償いとしてとらえ、前向きに生きようという意志の表れだったのでないかと思つた。

本の最後で、「原子爆弾というものがある故に、戦争は人類の自殺行為にしかならないのだ。」と博士は書いている。もし日本が戦争をしていなければ、原子爆弾の投下はなかつたかもしれない。原子爆弾の前には何者も無力であるのに、戦争に加わっていたことで日本は原子爆弾を投下されてしまったのだ。しかし人類が原子力の威力を手に入れた以上、戦争が起これば限り原子爆弾の脅威はなくなるならぬだろう。これまで数多くの国が原子爆弾などの核兵器を開発し、その強大な力を利用してきた。戦争をなくさなければ、それらの廃絶に向かう道のりは遠いだろう。原子爆弾のない世界での戦争などこれからは存在しない、だからこそ、まず戦争をなくすべきだと博士は考えたのだと思つた。博士が戦争のない平和な世界の実現を心から願っていたことがこの文章から伝わってきた。

全壊した天主堂のアンゼラスの鐘の音が、朝の原子野に響き渡る。永井博士と二人の子供たちが祈るところで本は終わった。穏やかな中に強い思いが感じられた。畳一畳の如己堂で寝たきりのまま、博士はこの本をはじめとする多くの作品を執筆したのだ。私たちが戦争や原子爆弾に関して知ることができるのは、それを体験した人々が後世に伝えてくれたからなのだと思つた。

戦争や原子爆弾に関してどれだけでも身をもって体験していない私には、その恐ろしさや苦しみを想像することしかできない。それでも、一番大切なのは無関心にならないことだ。戦後七十年の節目に、日本は大きな転換期を迎えている。憲法解釈を変えて集団的自衛権の行使が容認される見通しなのだ。将来、戦争に巻き込まれる可能性ができてきている。日本を取り巻く国際情勢が変化する中、日本も変わらざるを得ないのは事実である。しかし戦争が起きれば、誰かが必ず悲しむのだ。唯一の戦争被爆国である日本が率先して平和を守ることに大きな意味があると私は思う。長崎の原子爆弾の被害を最後にして平和を守ってきた姿勢を、日本は変えないでほしい。私にできることは日本の過去を知る努力をし自らの考えを持ち続けることだと強く思つた。